

福岡県農林水産部、JA、養蜂業者に ヒアリング



運営委員 小椋 和子

11月22日、福岡県庁農林水産部において県農林水産部職員ならびにJA全農ふくれん、(社)日本養蜂はちみつ協会福岡県養蜂組合事務局長等の4名が同席し、国民会議のメンバーがヒアリングを行った。

福岡県の養蜂の現状

最初に畜産課から福岡県の養蜂の現状および全国の状態の説明があった。それによると平成18年以降の統計では全国のミツバチ飼養蜂群数は17万群、飼養者数は5千名で若干増加傾向がある。福岡県ではほう群数が7千群で、長野・熊本・和歌山につぎ全国で第4位であり、飼養者数は140名である。

花粉交配用ミツバチの飼養状況をみると、平成21年度ではいちご等施設園芸用の需要が急増したために全国では前年比141.5%となり、全体の75%を占めるに至った。福岡県では平成20年から増加傾向にあり、平成21年にはいちご用が2557群数に対してその他が1055群である。以上の説明では養蜂について現在各地で起きているハチの大量死の問題点は指摘されなかった。

福岡でもミツバチが大量死

ミツバチの大量死については農水省も問題を把握していて研究者の募集を行い、検討を始めている。国民会議では、9月に訪れた北海道や今回博多パークホテルで開催した講演会で明らかになった点を質問した。各県の農水部では農薬によるミツバチへの影響を防ぐための注意が出されている。このことは福岡県でも承知しているが、実際にはどの程度の申し合わせや規制が行われているかについては説明さ

れなかった。県の農水部では実態を把握していないように見受けられたが、養蜂組合の方からの発言で福岡県でのハチの大量死の状況が明らかにされた。

養蜂業者としては巣箱を設置する場所が問題で、設置させて貰うという遠慮があり、個人的に対処するのに困難を強いられているとのことである。

カメムシ防除に用いられているダントツ（クロチアニジン）にかわってスタークル（ジノテフラン）が利用されるようになったとのことだが、いずれもネオニコチノイド系農薬であることから、被害がさほど軽減されるとは考えられないことや農薬のミツバチを考慮した使用説明書がわかりにくいことが農家から指摘されているとのことである。

養蜂業者による衝撃的な話はミツバチの大量死の原因を明らかにするべく名古屋大学（ハチの大量死の研究班）に死んだハチを送ったが、農薬は検出されなかったとのことであった。さらに生きているハチを送るようにとの要請があり、冷凍して送ったがウィルスは検出されなかった。ウィルスやカビが原因ではないということが明らかになったと考えてよい。一方、農薬の検出は分析方法が困難なので測定されなかった可能性があり、さらに検討されるべきである。ミツバチの死は全国的に起きていることであり、福岡県でも例外ではないことが養蜂業者の話で明らかとなった。

私達消費者は、ネオニコチノイド系と限らず農薬を大量散布しなくては行えない農業の見直しをするべきである。人類の生存を脅かしていることをハチや野生生物が教えてくれたのである。カメムシが原因と言われている米の白い斑点や傷がない果物や野菜のために目に見えない農薬を大量摂取していることを自覚しよう。

山田ともこ長崎県議会議員に聞きました!



質問者 事務局長 中下 裕子

山田ともこさんは、第1期目の長崎県議会議員(民主党)です。お父様は衆議院議員で前農水大臣の山田正彦氏。子育て・教育・医療福祉・地域活性化を中心に取り組んでこられましたが、今年からは農水委員会に所属し、農林水産、経済問題にも意欲的に取り組んでおられます。来春の選挙での再選を目指してお忙しいところ、インタビューの時間を取っていただきました。既に、国民会議の会員にもなっていてお読み、ニュースレターを読んで下さっているそうです!

質問 長崎県では2009年に1910群ものハチが死滅したとうかがいました。山田さんは、議会で、ミツバチ大量死とネオニコチノイド系農薬の問題について質問されたそうですが……。

山田 ミツバチの大量死の原因としてネオニコチノイド系農薬が疑われていました。長崎県ではイチゴの栽培が盛んで年間120億円の売り上げがあります。ミツバチがいなくなると養蜂業にも深刻な問題ですが、植物の受粉を担うミツバチが確保できなければ県の重要産業であるイチゴの生産にも大きな被害をもたらします。現に、去年はミツバチ不足でイチゴ農家が大変困りました。養蜂家も去年は何とか交配用ミツバチの貸し出しをしてくれたのですが、今後は貸せないといひます。そこで、県北地区をはじめ、西彼地区、島原地区では、当分の間「ダントツ」の使用を自主規制する旨の申し合わせができたのです。県としてもこうした対策を徹底する必要があるのではないかと、本年3月県議会の本会議で一般質問しました。

質問 県の対応はどうでしたか?

山田 県では昨年、各農協や養蜂業者に対して、農薬の散布時期の調整や巣箱の場所に関する情報交

換を行うとともに、水稻栽培においてネオニコチノイド系以外で代替可能な農薬(トレボンなど)を使用するよう指導していました。私の質問直後に発行された「営農ごよみ」では「ダントツ」が削除されていました。

また4月には県が主体となって、養蜂家、農家、JAを構成員とする「長崎県ミツバチ連絡協議会」が設置され、ミツバチ被害防止等に取り組むことになりました。同協議会には久志さんもオブザーバーとして出席しておられます。

質問 画期的な取り組みですね。しかし、現実には、JAの農薬販売担当者が「ダントツはFAXでは注文しないでくれ。口頭で注文してくれ」などと農家に伝えて販売しているという話もうかがいましたが……。

山田 自主規制といひても、在庫処分は販売を認めるという話だったそうですが、「ダントツ」の使用中止を徹底していく必要があると思っています。私としても、12月にも再度議会で質問するつもりです。

質問 自主規制の効果はあったのですか?

山田 JAのデータによると、ダントツの使用量は95パーセント削減されたとのこと。

質問 すごいですね! 国はネオニコチノイド系農薬とミツバチ大量死との因果関係を認めていないのですが、県が主体的に代替化をすすめていけばネオニコチノイド系農薬の使用量を大幅に削減できるのですね。ぜひ、長崎県がリーダーシップを発揮して国を動かしてもらいたいと思います。再選を心よりお祈りしています。本日はありがとうございました。

山田 ネオニコ問題については引き続き取り組んでいくつもりです。ありがとうございました。がんばります!!

ミツバチたすけ隊を訪ねて

佐世保スタディーツアーの報告

理事 中地 重晴
(熊本学園大学)

はじめに

11月20日～22日にかけて行ったネオニコチノイド九州調査（キャラバン）の2日目は、長崎県佐世保を中心に活動している久志富士男さんとミツバチたすけ隊の活動を見学するスタディーツアーを行いました。参加者は立川代表理事夫妻、中下事務局長、運営委員の小椋、水野、中地、事務局の植田の7名でした。

秋の行楽シーズンで、よく晴れて、九州でも紅葉が進んでいる中、ニホンミツバチの生活に触れる一日となりました。福岡から佐世保往復という強行軍でしたが、充実したスタディーツアーになりました。

ミツバチたすけ隊の学習会と長崎の状況

ミツバチ助け隊の代表である久志富士男さんには、国民会議の学習会のために何度も上京していただき、ニホンミツバチが大量死した経験と、農薬の使用を自粛して新たにミツバチの養殖に成功している壱岐や五島列島のお話をいただいています。

今回は佐世保市のアルカスSASEBO交流スクウェアで開催されていた「ニホンミツバチに学ぶ～人・自然の関わり、生物多様性について」というパネル展示会と久志さんの講演会に参加しました。

講演会には約40名の市民の方が参加されていました。久志さんの方から、ある日突然飼っていたニホンミツバチが死んでしまった経験と、その原因がネオニコチノイド農薬「ダントツ」であることや、長崎県では一昨年あたりから農協がダントツの使用を奨励し、いたるところで散布したために虫がいなくなったことなど、自分の足で回って調査したことを、写真を示しながら説明されていました。

夜間、真っ暗なところにある自動販売機の写真を見せながら、普通なら自動販売機の蛍光灯の光を

ざして昆虫や蛾が集まってくるが、佐世保市内の自動販売機には一匹も虫がいなかった。それに対し、ダントツをまいたことのない壱岐の自動販売機には昆虫が集まって、ガラス窓にひっついていて写真が撮れました。（表紙の写真を見て下さい）

お話を聞きながら、確かに都会でも以前は自動販売機のガラス窓に虫や蛾が集まっていたように思うが、いつの頃からか見かけなくなると変に納得しました。何気ないところからの久志さんの観察力に感心しました。久志さんのお話では虫だけでなく、ハトなどの鳥類もいなくなってしまっていて、犬も弱っていて、ダントツの被害は非常に大きく末期的な状況にあるとのことでした。

長崎県は昨年、夏にミツバチが大量死したために、秋から県の農薬、養蜂担当者と関係者を集めて、ミツバチ被害対策協議会を開催するようになったが、手遅れであるとの報告でした。今年は農協では「防除暦」からダントツを無くしたが、在庫があるためか、電話でダントツを注文してくれるよう口コミで農協の職員が販売していて、全然反省していないという啞然とする報告も聞けました。

また、壱岐や五島列島の福江島では、農薬をまかない地域を確保し、新たにニホンミツバチの養殖に取り組み始め、蜜も収穫できるようになり、新しい産業として島おこしの起爆剤として期待されているという元気の出る話も聞けました。

久志さんのお話の後、質疑では主にミツバチを飼っている方からの技術的な質問が多かったですが、子供を育てるために、無農薬自然食品を選んで食べるようにしている市民の方から、もっとダントツの被害を明らかにして、使用させないための運動をすべきだという意見が出され、会場の中で共鳴す



写真1 COP10で展示したパネル写真

る声が出たのが興味深かったです。

パネル展示をみて

COP10で展示したパネル写真約50枚を交流フロアで展示されていました。音楽発表会や他の催しに訪れた市民の方々も、ミツバチの大量死の実態と日ごろ目にしないミツバチの生態に関する写真がわかりやすく展示されていて、食い入るような眼で覗き込んでおられました。

パネル展示の様子は写真1のとおりです。

久野さん宅を訪問

実際、ニホンミツバチを飼っているところを見学させてもらおうとしましたが、去年ほとんど死んでしまって、まだ回復していないということで、一番農業被害の少ない地域にすんで居られる久野さんのお家を訪ねました。お仕事で家人は居られませんが、久志さんから以前は5箱育てていたが、近くの棚田でダントツをまいたので、今は2箱になり、ミツバチの数も減っているとの説明を受けました。

また、ニホンミツバチは飼い主にはおとなしく、巣箱に手を突っ込んでも刺さない。巣箱の入り口の前に立つと妨害者として羽音を立てて威嚇してくるが、横に立てば何もしないということなど、ミツバ



写真3 ミツバチの巣箱を販売（パネル展示会場にて）



写真2 ミツバチの飼い方を教えてくれる久志さん

チの飼い方のいろはを説明していただきました。（写真2）

ミツバチたすけ隊は久志さんの話を聞いて共鳴した古武術の愛好家が集まってできたグループというお話を聞き、意外な組み合わせにびっくりした次第です。資金稼ぎに巣箱（写真3）を制作しているところなどを見学させてもらいました。

講演会報告

「ミツバチはなぜ消える！～新農薬ネオニコチノイドの危険性～」



運営委員 小椋 和子

11月20日、博多パークホテルで表記講演が行われた。講演はグリーンコープ生協ふくおか副理事長の小松実加氏の開会の挨拶で開始された。

はじめに、「生態系と農薬」について立川代表理事の講演があった。

福岡ではかつて塩素系農薬のBHCが最も多く使用された。今は新しいネオニコチノイドがそれに変わった可能性がある。BHCはすでに使用禁止であるが、ネオニコチノイドも同様の措置が早急に行われることが望まれる。

次の講演はみつばちたすけ隊の久志富士男氏による「ネオニコチノイド農薬による昆虫と鳥類の消滅」である。10月に名古屋で開催されたCOP10にはみつばちたすけ隊がブースを開き、ミツバチの大量死を訴えた。COP10では名古屋議定書が議決されたが、これに加え、生物多様性を保全するために2010年以降の国際目標「愛知ターゲット」が採択されたことが紹介された。氏によると長崎県ではすでに多くの被害が発生していることが明らかになっているにもかかわらず、2009年にネオニコチノイド系が推奨され、生物多様性が破壊されたことが紹介された。

3番目の講演は、東京都神経科学総合研究所の黒田洋一郎氏による「環境化学物質と子どもの脳の発達障害—ネオニコチノイド・有機リン農薬の危険性—」である。

有機リンは脳の神経伝達物質アセチルコリンを分解する酵素を阻害する。したがって信号が伝達された後もON状態になり、アセチルコリンが蓄積され

毒性を発揮する。それに対してヒト脳内のニコチン性アセチルコリン受容体は脳内に広く存在しているが、その役割は長らく不明であった。近年になり記憶・学習・認知など高次機能に関与し、さらに抗不安作用や鎮痛効果など多様な性質を持つことが分かってきた。ネオニコチノイドはこの受容体に結合し、アセチルコリンがなくても神経伝達のスイッチがONになる。農薬のネオニコチノイドならびに有機リンはこのように神経回路を傷害する。種を選ばず、すべての生物の神経回路を破壊するこのような農薬の使用は、人間に対しても同様な影響を与えることを学ばなくてはならない。とくに脳関門が発達していない子どもへの影響が心配される。

4番目の講演は国民会議理事の水野玲子氏による「新農薬ネオニコチノイドのヒトと生態系への影響—海外の取り組みに学ぶ—」である。

1990年初めからヨーロッパ諸国でミツバチ大量失踪が報告され、アメリカでは2006年10月には4分の1のハチが消えた。日本でも2009年6月には21都県でミツバチ不足が報告された。ネオニコチノイド系農薬がその原因として最有力にもかかわらず、多くの原因が取りざたされている。国際獣疫事務局(OIE)は2010年に原因は複合的と発表した。

日本では諸外国に比べて食品への残留基準が高い。アセタミプリドの残留基準はEUにくらべて、茶葉、イチゴ、ブドウ、キャベツ、ブロッコリーで500倍の濃度である。ネオニコチノイド系は農産物のみならず、建築材、ガーデニングに使用されているので、消費者は使用の際には十分に調査をしなければならない。ネオニコチノイド系のみならずフィプロニル（フェニルピラゾール系の浸透性農薬）にも注意が必要であることが指摘された。